極楽寺だより

2017（平成29）年3月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）　〒759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬3633 ☎0837-43-0625

春の彼岸会法座のご案内

昨年の夏は、本当に暑かったですね。盆法座にお参りいただくのも、恐縮するほどでした。地球温暖化の影響でしょうか。これからも酷暑の夏が続きそうです。

ということで、夏の盆法座を一日減らし、お参りのしやすい時期にと、春の彼岸会法要をはじめることにいたしました。半日だけの法座ではありますが、ぜひお参り下さい。

三月三日（金）

昼一時半より

講師　長門市 光浄寺住職

小内良文 師

【お知らせ】

土手・大竹・中村の世話人が、竹林啓助さんから田中正幸さんに代わります。

竹林さん、これまで有難うございました。田中さん、どうぞよろしくお願いします。

極楽寺ホームページ

http://極楽寺.com/

極楽寺だよりの過去の記事をはじめ、盛りだくさんの内容です。

新キャンペーンが始まります

オシエノカケラ
極楽寺だより エッセイ

声に出して、お念仏を称えましょうキャンペーン

昨年、四年間十三回にわたり『極楽寺だより』の紙面にて行っておりました、『毎日お仏壇に、お参りしましょうキャンペーン』が終了いたしました。「えっ？そんなことをしていたの？」と言われる方もおられるかもしれませんが、そんな声には挫けずに、また新たなキャンペーンを行うことにいたしました。今回は、題して「お念仏を声に出して称えましょうキャンペーン！」です。

浄土真宗では、声に出してお念仏を称えることを、とても大切にします。そしてそれは、私が称えた念仏ではあるけれども、阿弥陀様からの呼び声であると受け止めなさいと教えられるのです。

そりゃ、そうですよね。生まれてから、誰にも教えられずに「南無阿弥陀仏」と言う人なんか、いませんよね。みんな誰かの真似をして「南無阿弥陀仏」と言っているわけです。

そして、その前の人は、その前の人を。その前の人は、その前の人を真似て、お念仏を称えたわけですから、遡れば、親鸞聖人にまで行きつき、七高僧様、お釈迦様、そして阿弥陀様まで行きつくわけです。その阿弥陀さまからの呼び声が、長い歴史を通して、いろんな人を通して、今ここに、私の口からお念仏が出ている。これって凄いことだと思いませんか？

私たちの先輩方は、お念仏を称えながら、阿弥陀様の呼び声を聞き、阿弥陀様の心と出遇っていかれたのです。その中で、育てられ、目覚めさせられ、導かれながら、苦難の人生を阿弥陀さまと共に生き抜かれ、お浄土へと往生していかれたのです。

皆さんは、お念仏が身体に染み込んでいるようなお年寄りと出遇われたことがありますか。日常生活をお念仏と

共に生き抜かれた方って、凄い存在感ですよ。圧倒的なリアリティーがありますから。もう「染み込んでいる」という表現がピッタリ。一朝一夕では染み込みませんからね。とても適わないなぁと思わず溜息が出るほどです。そんな方々が、昔はたくさんおられました。

ちなみに、よく漫才や落語で笑いをとった時に、「ウケる」というでしょう？あれは、身体にお念仏が染み込んだ方々から生まれた言葉だという説があることを、ご存知ですか。お説教の際に、「なまんだぶ、なまんだぶ」と聴聞されている方々がお念仏申される。お話のクライマックスで、感動的な場面になるとまた、「なまんだぶ、なまんだぶ」と聞こえてくる。これを「受け念仏」と言うのですが、「今日は、受け念仏が多かったなぁ」「今日は、受けが多かったなぁ」「今日は、ウケたなぁ」と変遷していく中で、漫才や落語で笑いをとることを「ウケる」という言い始めたのだとか。↘

近頃は、声に出してお念仏を称えることに、気恥ずかしい思いをされる方も多いようです。ですから、まずは、自分に聞こえるくらいの声から始めてみるというのはいかがでしょうか。

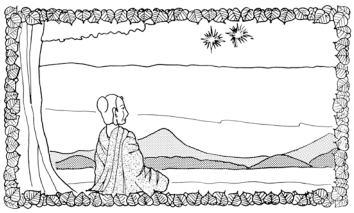
長い歴史を通して、私に呼びかけられている阿弥陀さまの呼び声を、心を味わっていく。そこに、思いもよらない豊かな世界が広がっていくことを、先に歩まれた方々の後姿を通して教えられています。■

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

作法一口メモ

「なもあみだぶつ」とお念仏を称えるのは、悲しい時だけではありません。 喜びの時も、感動の時も、そして怒った時にも。

お念仏を称えるということは、自分を振り返りながら、「阿弥陀様と共に人生を歩むこと」「阿弥陀様をよりどころとし、導かれ、育てられながら生きるということ」なのです。



極楽寺掲示伝道
けいじでんどう

死を忘れると生がぼやけてくる

極楽寺掲示伝道

青山俊董

3月の言葉

私の愛して止まない広島カープのレジェンド（伝説・偉人）といえば、黒田博樹投手です。昨シーズンの優勝を区切りとして引退した彼は、弱かった時代のカープを支えた後、アメリカのメジャーリーグでも活躍。年俸二十一億円ともいわれる誘いを断り、カープへ帰ってきてくれた「男気」溢れる名選手でした。

四十一歳で引退を決めた黒田投手は、ここ数年「これが最後の登板になるかもしれない」「これが最後の一球かも」という覚悟で、心を込めて投げていたそうです。まさに茶道の「一期一会」（茶会は二度と繰り返されることのない一生に一度の出会いであるという、亭主と客の心構え。）に通じます。

ラテン語には、「メメント・モリ（死を思え）」という言葉がありますが、↘

思想家の内田樹先生は、

「私は明日死ぬかもしれない」ということを、いつも念頭において暮らしなさい、ということです。そうすると「当分オレは死なないだろう」と高をくくって暮らしている場合よりも、生きている時間の質が高まる。ひとつひとつの経験の意味が深まり、ひとつひとつの愉悦の奥行きや厚みが増す。生きることの深みや厚みや奥行きを味わい尽くしたいと願うなら、「死を思え」。そういうことだと僕は理解しています。

（『困難な成熟』内田樹）

と言われています。確かに、「死」というものを生活から排除した現代社会では、「生きる」ということがどうもボンヤリしているのではないでしょうか。「これが最後かも」と思うからこそ、人生の一瞬が輝いてくるというのは、深くうなずける話です。

仏教では、無常ということを言います。この世のものに常なるものはない。すべてが留まることなく常に移り変わっていくのだと。つまり、この私にもいつ死が訪れるかわからないのです。だからといって、「どうせいつ死ぬかわからないのだから、好きなこと、やりたいことをやった方がいい。」と投げやりに人生を生きることは、虚しい生き↖

方です。第一、次の世代のことも考えない、やりたい放題の生き方では、周りの迷惑でしかありません。それよりも、ひとつの出遇いの尊さを、ひと時のかけがえのなさを、深く味わうことの方が、よほど人生を豊かにするのではないでしょうか。

先日、ご門徒の方と話していましたら、「この歳になると、明日どうなるだろうかと不安です。」と言われたので、黒田投手の話と共に、ならば「これが最後の出遇いになるかも」と、ひと時を大切に生きるというのはどうでしょうかと、提案してみました。ひと時を無駄に、雑に生きている私には、こんなことを言う資格はありませんが、話しながら自分の背筋も伸びたような気がしました。■

2月の言葉

春先のある日のこと、玄関から「ごめんくださ～い」と声がしました。出てみると、「納骨堂の一階の扉を開けたままにしていたら、ツバメが入ってしまい、出ていかなくなってしまった」とのこと。うちの納骨堂は階段が吹き抜けになっていますから、ツバメは二階に上がり飛び回っています。

二階のベランダの扉を開ければ出てくれるだろうと思っていたのですが、扉の上にあるはめ込みのガラス戸に当たっては落ち、当たっては落ちを繰り返すばかりで、なかなか出ていってくれません。

少し視点を変えれば、広々とした自由な世界が広がっているのにも関わらず、目先のガラス越しの景色に捉われて出ていけない。そんなツバメにイラッとしながらも、ハッと気づかされたのです。これって、私たち人間の生き方と同じではないかと。↖

極楽寺だより
2017(平成29)年3月号

私たちは、「こうしたい」「こうでなくてはならない」「こうすべきだ」という思いに縛られて苦しんではいないでしょうか。少し視点を変えれば、広々とした自由な世界が広がっているのにも関わらず。特に近頃は、目先の「役に立つか立たないか」「損か得か」「好きか嫌いか」という自分の都合を優先する時代ではないでしょうか。でも、目先の「役に立つか立たないか」に捉われると、自分が役に立たないと思ったら、生きていけなくなりますよ。

阿弥陀如来という仏様は、私の都合(願い)をかなえて下さる仏様ではありません。あなたの願いは、あなたを本当にしあわせにするのですか？あなたは、あなたの願いに縛られて、かえって苦しんでいるのではないですか？」と、私たちに問いかけて下さる仏様なのです。

考えてみれば、近頃は「自由」を求める時代になりました。でも、自分の都合よく、思い通りにすることを、仏教では「自由」とは言いません。それは、煩悩に縛られているだけのこと。お金に縛られ、賭け事に縛られ、スマホに縛られ、ゲームに縛られ、便利さに縛られている。かえって、息苦しい生活になってはいないでしょうか。

目先の都合という枠組みが、かえって自分を苦しめていくのです。その枠組みを揺さぶることで視点を変え、広々とした世界を指し示して下さる。それが、仏法のはたらきなのです。■

❑映画『この世界の片隅に』が、キネマ旬報日本映画ベストワンに選ばれました。この映画は、まさに名作、いや傑作と言い切れるほどの作品だと思います。クスクス微笑み、ハハハと笑い、ホロリと涙がこぼれ、最後には号泣状態。しばらく立ち上がることができませんでした。太平洋戦争末期の広島・呉を舞台にしたこの作品。抗うことのできない時流の中で、それでもこの世界の片隅にある小さな喜びを感じながら生きようとする人々の姿を描いています。いや、そんな片隅に生きる人々の営みによって、今もこの世界は成り立っているはず。一部の政治家や投資家たちのものでは、決してありません。単なる「反戦」という言葉では語り尽くせないほどの、豊饒なメッセージに満ちた素晴らしい映画でした。❑宇沢弘文という経済学者は、「本来は人間の幸せに貢献するはずの経済学が、実はマイナスの役割しか果たしてこなかったのではないかと思うに至り、がく然とした。経済学は、人間を考えるところから始めなければいけない。」と言われています。経済優先・市場原理主義という考え方が格差を生み、人間らしさを奪い、断絶や怒りを生み出し、トランプ現象へとつながって世界は混乱に向かっています。こんな時代だからこそ地に足をつけ、この世界の片隅にあるささやかな営みをこそ、尊んでいかねばならないのではないでしょうか。今こそ、優しさを。誠実さを。朗らかさを。(住職)